

手前は自作のテーブル、撮影の途中で「ピキッ」と音を立てた（阿寒の工房で）



釧路郷土芸術賞に輝く

受賞者の
横顔

■上■

財団法人釧路教育芸術振興基金（春日井茂理事長）は2005年度（第34回）「釧路郷土芸術賞」受賞者を決めた。日本古来の手法と現代アートを融合させ家具など生活雑貨を創作する釧路市阿寒町の木工家、勝水喜一さん（46）、釧路北陽高校出身で現在は東京を拠点に歌曲のリサイタル、宗教曲ソリスト、オペラでも活躍するバリトン歌手の浅井隆仁さん（34）、特別賞は北国に生きる人間の姿や生活を題材に創作を続ける釧路市出身で栗山町在住の米坂ヒデノリさん（71）が受賞した。それぞれの横顔を追う。

「麓（ろく）工房」設立

「ピキッ」。舌辛原野の工房、テーブルから音が鳴った。「木が自然にゆがみ、ずれる音。家具と雑貨を作る。阿寒の森でも、まだ木は生き

木工家

勝水喜一さん（46）

（釧路市阿寒町舌辛原野）

続けている」。

道東産の腐れや割れ、

ひびのある一般的には製

品化されない「等級外」

の木を素材に家具や生活

雑貨を作る。阿寒の森で

5年ほど寝かせ、自身の

道東産の木で家具創作 独自の表現法、高い評価

手で乾燥、製材も手掛け立する。現在までに釧路ををはじめ東京、札幌、京し、くきは使わない。日本都などで個展を開催。木の自然な形状と日本古来木で、木を抱き合わせの手法、現代アートを融合させた独自の表現法が、高い評価を受ける。札幌芸術の森クラフト全国公募展金賞、北の生活産業デザインコンペティション銅賞などを受賞。2003年には米国フィラデルフィアで開かれた「家具作家協会全米大会」に招かれた。

多くの協力のおかげ

「あくまで生活道具である自分の作品を芸術の枠に入れてもらえたことがうれしい。作りたい物だけをやるわがままなやり方で10年余り生業として続けることができたのが奇跡的。多くの方の協力のおかげ。その重みに改めて感謝する」。

創作のテーマは「陸（ろく）」。

大工が使う「平面」を意味する言葉だ。

木をかんなで平面に仕上げ

ける「陸を抜く」作業は

大工の原点。「陸は平和

も意味する。心静かな生

活を支える道具づくり

が、自分の原点」、工房

の手製のいすに静かに座

り直した。

をこつ評す声がある。

釧路市出身。東京造形

大デザイン科卒業後、飛

騨の匠に大工として弟子

入りする。93年、阿寒に

「麓（ろく）工房」を設

（佐竹直子）